

あんどう なな  
安藤 奈々

読売新聞東京本社 医療部



#### <略歴>

2010年 3月：中央大学法学部卒業

2010年 4月：読売新聞東京本社入社

2017年11月：長野支局、経済部などを経て、医療部へ。

現在は主に小児医療、生殖医療を担当。

## “知る”きっかけをつくる情報発信

安藤 奈々

読売新聞東京本社 医療部

医療記者になって間もない頃、難病の「脊髄性筋萎縮症（SMA）」の新薬が開発され、取材をした。それをきっかけに、難病の研究や、難病患者と家族を取り巻く社会課題などをテーマに紙面で取り上げてきた。

難病は「発病の機構が明らかでなく、治療法が確立していない希少な病気で、長期にわたり療養を必要とするもの」と定義されている。一方、SMAにはここ10年のうちに画期的な新薬が複数開発され、患者の治療環境は大きく変化している。SMAは、難病でも治る未来を期待できる時代の扉を開けた代表的な疾患だ。

治療法の登場で、次は1日でも早く治療につなげる「早期診断」が重要となった。生後間もない赤ちゃんの血液から先天性の病気を見つける検査「新生児マススクリーニング」の対象疾患にSMAを加える各地の動きをいち早く捉え、全国の検査状況を同僚とともに独自調査した。2023年1月、朝刊1面で調査結果を報じ、体制に地域差が生じている実態を伝えると、大きな反響が寄せられた。その後、患者家族会や専門医の尽力により、国の実証事業という形でこの検査の導入が各地に広がりつつある。現在も引き続き、公費による全国一律の実施に向けた動向を追っている。

こういった調査報道をふくめ、難病の正確な診断・治療に結びつけ、患者や家族に寄り添い支える人を増やしていけるよう、これまで情報発信に取り組んできた。

ただ、希少ゆえ特有の課題もある。情報の専門性が高く、患者数の少ない難病について多くの人に関心をもってもらうには、読者との「接点」を見出していくことが大切だ。医療情報にふれる入り口をどう設けていくか、その意義を考察する。